

上高地の樹木

昭和 9 年(1934)に国立公園に指定された上高地は、自然公園として保護され年間 120 万人以上の修学旅行生や海外からの観光客などが訪れる素晴らしい山岳景勝地で、塩尻市立自然博物館でも定期的に観察会を実施している場所です。

しかし、人為的に持ち込んだ外来魚(カワマス、ブラウントラウト)により交雑種が増えて在来種のニッコウイワナが減少したり、護岸工事によりケショウヤナギの生育場所が少なくなったり、観光客が持ち込んだ下界の植物が繁殖したり、夏期に河童橋や明神橋付近でカラスが増えたり、本来の自然環境からは変化していることもあります。このような点については、管理者だけでなく利用者も含めて皆で考えていかなくてはならないでしょう。

ここでは、上高地に生育している特徴的な樹木について説明します。



1. 針葉樹

(1)カラマツ

平坦地で見られる大木は植栽されたもので、現在 110 年以上の樹齢です。焼岳の東側斜面で見られるカラマツ林は、陽樹の性質から裸地に先駆植物として成長したもので、春の新緑や秋の黄葉が美しく、被写体として写真家の皆さんがカメラを向けるものです。



(2)コメツガ

焼岳や有明山の山裾にはコメツガの純林がありますが、上高地にはありません。シラビソやダケカンバなどと単木的に混交林をつくっています。



(3)ウラジロモミ

葉の形は似ていますが、樹皮がウラジロモミは茶褐色で鱗状にはがれやすく、シラビソは灰白色で平滑なので区別はつきます。秋に 8cm 位の暗紫色の球果をつけますが、梢の高い所になるので下から見つけるのは難しいです。



(4)シラビソ、オオシラビソ

上高地の平坦部ではシラビソが多く、岳沢登山道を 1,800m 位まで登っていくとオオシラビソが多くなります。オオシラビソの球果は黒紫色で 10cm 位あり、シラビソのものより一回り大きい。

(5)サワラ

上高地の遊歩道付近にはヒノキはほとんどありませんが、サワラは大正池から明神あたりに多く自生しています。葉の形はよく似ていますが、ヒノキは葉の裏の気孔が白く Y の字に見え、サワラは X の字に見えるので区別できます。

(6)その他

チョウセンゴヨウの松ぼっくりは 12cm ほどもあり、他の松ぼっくりと間違えることはあ

りません。リスやサルにかじられた大きなエビフライ状のものも落ちていることがあるので、見つけると楽しいです。

トウヒは樹皮が暗褐色の鱗状ではがれやすく、松ぼっくりはやや細長い 6cm 位なので他の針葉樹とは区別は簡単です。

イチイの雌木は赤い実をつけ小鳥に食べられることにより運んでもらい、種子が発芽して繁殖しています。一刀彫の材料としては、最高級品とされています。

ネズコは明神から徳沢、横尾に行くにしたがって目につくようになります。サワラと同じような形の葉をしていますが、ネズコの方が厚く硬い特徴があります。

上高地の平坦地の大部分は、陰樹の針葉樹の下層に陰樹の針葉樹が育っている極相林で安定した植生となっています。時には台風などで大木が倒れると、局所的に太陽光が差し込む場所ができて、広葉樹のサワグルミやハンノキなどの小さな群落ができることもありますが、そこも時間がたつと下層に陰樹が育ちやがて安定した極相林となります

2. 広葉樹

(1) ケシヨウヤナギ

上高地には 10 種類以上のヤナギが自生していますが、ケシヨウヤナギは幼木の樹皮が白くなりおしろいを塗ったように見えるため名前が付いたとされています。川原の砂礫地が適地ですが、大木では樹高 30m にもなります。初夏の天気の良い日、ふわふわと綿毛がたくさん飛んでいるのを柳絮と言い、ドロノキ等の種子が舞っているのです。



(2) コナシ(ズミ)

初夏の小梨平周辺では、コナシの白花がきれいに咲いている。エゾノコリンゴも同じような白花で混じって咲いているが、コナシは小枝にトゲが多く葉に切れ込みが多くあるので、区別できます。



(3)ハンノキ

氾濫原の日当たりの良い湿地に最初に生育するハンノキは、サワグルミやハルニレが現れる前の先駆的樹種です。上高地では、ケヤマハンノキ、ヤハズハンノキ、タニガワハンノキを見ることができます。



(4)シウリザクラ

高冷地に自生するサクラには、タカネザクラやミヤマザクラ等がありますが、このサクラの花はウワミズザクラのように白い穂状でブラシ様になっています。上高地では、ヤナギの次に葉の展開が早く、5月下旬に白花は満開となります。



(5)ハルニレ

サワグルミ、ヤチダモ、シナノキなどと河畔林を形成し、30m ほどの高木になる。北海道大学のキャンパスでは、エルムと呼ばれ並木が観光名所になっています。

(6)その他

ダケカンバは 1,500m 付近を境界線としてシラカンバと棲み分けており、より高冷地に肌色の樹皮のダケカンバが自生しています。上高地の平坦地は、ちょうど両者が混在して見られる場所です。

シナノキは7月上旬に香りのよい淡黄色の花が咲き、花序にへら状の苞をつけます。古くは内樹皮の繊維を布や紐に加工し、長野県にはこの木が多くあったので「信濃」と呼ばれたと言われます。

ナナカマドは平坦地で多く見られますが、涸沢などの高標高地では、ウラジロナナカマドが多く自生し、葉の裏面が白く鋸歯が先方に半分位しかないので区別できます。

ホンシャクナゲはツクシシャクナゲの変種で、葉の裏側にビロード状の毛がないことで区別できます。6月中旬頃、徳本峠の入口付近に群生して薄紅色の花を咲かせて山を彩ります。

オオカメノキは 4m ほどの低木で、6 月頃に白色の散房花序を出し 5 枚の花弁がつきます。別名ムシカリと呼ばれ、早い時期に虫に喰われて葉が網のようになる特徴があります。果実は赤～黒色になり、野鳥が食べるため冬にはほとんど残りません。